

提言

希望は強い勇気であり、新たな意思である

「原爆で被爆した人が、真実ではないことで差別を受ける、身体的な苦しみ追い打ちをかけるように精神的な苦しみも味わった人生は、なんと不条理なんだろう。」

私は昨年から熊本における高校生平和活動に参加しているのですが、前記の言葉は、昨年（2020年）8月9日に、長崎に原爆が投下されたその場所で、高校生平和大使長崎派遣メンバーの1人として平和の鎖をつくり、恒久的な平和を願い、戦争犠牲者に黙祷を捧げ、被爆者から戦争体験をお聞きした時の感想です。被爆者が語る言葉は戦争の悲惨さを伝え、それまでは教科書に載っている単なる過去の出来事と捉えていた戦争がこんなにも残酷で惨たらしいものだったことを認識させられました。



第24代高校生平和大使
福原 杏さん

や、放射線の影響で抜けた髪を隠すためにかぶっていた帽子をとられ笑われたことなどを話されました。戦争で傷を負った者同士なのに被爆者への差別があったんだと心を痛めました。戦争は老若男女関わらず命を無差別に奪うだけでなく、身体を傷つけ、心も傷つける「絶対にあつてはならないものである」という思いをさらに強くしました。

ある被爆者の方は私たちに「本当は思い出したくない経験を話すのは辛い。前は語り部として話す勇気もなかったし思い出したくない記憶だった。」と話されました。しかし、戦後70年以上経った今日、被爆者の方たちは戦争を知らない私たちへきのこ雲の下で何があったのかを伝えなければならぬという強い使命感を持っておられます。その姿を見て、私はあらためて真剣に聞かないといけないと思いました。

昨年8月の長崎での研修を終えて熊本に戻った際に、私は「自ら進んで核兵器や戦争、平和について学ぶ人が私の周囲にどれくらいいるのだろうか」と疑問を持つてしまいました。それは、熊本県において高校生平和大使の知名度が低いこと、私と同世代の若者たちが戦争や原爆投下の事実について無関心であり、知識不足の人が多いということから来る感情でした。このままでは、唯一の戦争被爆国である日本の被爆体験・戦争体験が風化してしまい、核兵器廃絶をアピールすることから遠ざかっていくのではないかと危惧しました。だからこそ私が先頭に立って平和について発信しようと改めて思いを強くしました。

「希望は強い勇気であり、新たな意思である」というマルティン・ルターという言葉があります。この言葉が私の原動力となり、今年第24代高校生平和大使選挙会へ応募する気持ちを後押ししてくれました。私が活動するにあたって思うことは、「みんなに核兵器という存在を身近なものとして捉えて欲しい」ということです。先日、講演会を行った中学校では何人かの生徒が核兵器禁止条約の存在、そして核抑止力の問題について発言してくれました。私は同年代の中にも深く考えている人たちがいることにとても感動したと共に安心しました。私たちのあとに続く後輩たちがいることを実感したからです。

クリスチャンである私は、教会での礼拝を通して、「平和を実現する人々は幸いである」という箇所を朗読し、説教を受けた時にハッとさせられた経験があります。ここでは平和を祈る人々でもなく平和を願う人々でもなく平和を実現する人々と書いてあるからです。

高校生平和大使の活動の一環として若い世代への継承活動を行っています。感想のほとんどは「平和は大切だと思った」「戦争と核の悲惨さを伝えてくれてありがとうございます」「はじめとした平和を願う感情が多く、自分自身にも起こりうる可能性があると考えているものは残念ながら見られませんでした。ただ平和を願い、折り、思うだけではなく、「自分には何ができるのか」と考えること、他人事ではないと考えることが大切だと思います。そして、私たちのような若い世代が、被爆者の方々の願いに応えるために立ち上がることが大切です。」

そのために、自分は何をすべきなのか。核兵器廃絶についてのアピールをしていくことは勿論のこと、その根拠となる核兵器をめぐる世界情勢についてもっと勉強する必要があります。私たち高校生平和大使の活動は、世界の核兵器廃絶に対して大きな影響を与えるものではないかもしれませんが、無力ではありません。少しでも世界が平和になれるように取り組んでいこうと思います。